

第五講 戦後体制の終焉

リュサンドロスの帝国の終焉

友人という私的な関係（ヘタイリア）にある者たちを諸都市の独裁
的権力者に立てる（Xen. *Hell.* 3. 4. 2; 7 : ἐταίρια; Plut. *Lys.* 5. 5; 13. 5; DS. 13. 70）
親アテナイ派・民主派を追放
寡頭政というよりは一種の革命政権を樹立
スパルタ人ハルモステスと守備隊による全面支援
強力な艦隊維持
スパルタ政府（エポロス団）の手で諸都市の十人政権の廃止
（Xen. *Hell.* 3. 4. 7）

スパルタ国内の対立を喚起する

アーギス家のパウサニアスの警戒と対抗心
5名のエポロスのうち、3名がパウサニアスを支持
王政廃止を企てる？

アテナイ民主政の復活

極めて用心深く
旧 30 人政権派の人々の弱体化を図る
海外派兵（騎兵）・訴訟

ペルシアとの対立

ティッサペルネスの訴え
キューロスの反乱とスパルタの協力（前 400 年）
ティブロン（ハルモステス）の派遣（前 399 年）（Xen. *Hell.* 3. 1. 4）
ネオダモデイス：約 1000 名・ペロポネソス兵：4000 名
アテナイ騎兵：若干名
デルキュリダスの派遣（Xen. *Hell.* 3. 1. 8）
アゲシラオスの派遣（Xen. *Hell.* 3. 4. 2）
スパルタ市民：30 名、ネオダモデイス：2000 名、
ペロポネソス兵：6000 名
ロドス人ティモクラテスの派遣（Xen. *Hell.* 3. 5. 1）

Plut. *Lys.* 13. 3-4.

「[3]民主政やその他の政治体制を廃止し、それぞれのポリスにラケダイモン人の^{ハルモステス}司政長官一人、ポリスごとに自ら組織した仲間の中から十名のアルコンを残したのであった。[4]おまけにそのことを敵対しているポリスにおいても同盟国となったポリスにおいても差別なく行い、時間をかけて沿岸伝いに航行し、ある意味で自分のためにギリシアの覇権を手に入れたのであった。というのは高貴なものたちや富裕者をアルコンに任命せず、仲間や

特に親密な間柄の人々に国事を引渡し、賞罰の権限を渡し、自ら数多くの死刑判決を下し、親しくしている人々の敵を追放し、不当にもギリシアにラケダイモン人の支配の型を与えたのであった。」

Xen. *Hell.* 2. 2. 20.

「ラケダイモン人はギリシアの地に起きた非常な危機に際して大いなる功績を成し遂げたギリシアのポリスを奴隷化すべきではないと述べ、長壁とペイライエウスを取り巻く市壁を解体し、12 隻を除く艦船を引渡し、亡命者を帰国させ、ラケダイモン人と同じ敵と友を承認し、陸上においてであれ海上においてであれ彼らが指揮するところ何処へでも随行すべきことという条件で講和条約を締結したのであった。」

Xen. *Hell.* 2. 3. 6-7

「[6]リュサンドロスによって全周包囲されたサモス人が、最初、協定を結ぶことを望まなかったので、リュサンドロスは直ちに攻撃することを考えていたが、自由人は各人一枚の衣服を携えて退去し、全てを引き渡すことに同意した。このようにして彼らは退去したのであった。[7]リュサンドロスはかつての市民にポリス並びに万事を委ね 10 名のアルコンを任命し、同盟艦隊を祖国に向けて航行させ解散した。」

Xen. *Hell.* 2. 4. 29.

「事態がこのような好転すると、パウサニ阿斯王はリュサンドロスを妬み、リュサンドロスが以上のことを成し遂げることにでもなれば、一方では名声を博し、他方ではアテナイを自分のものにしてしまうのではないかと、三名のエフォロスを説得して軍を率いて出陣したのである。」

Xen. *Hell.* 3. 4. 7-8.

「[7]アゲシラオスが平静かつ悠々とエフェソスで時を過ごしていると、諸ポリスにおける政治体制は混乱しており、アテナイ人の許にあったような民主制は存在せず、リュサンドロスの許にあったようなデカルキアも存在しなかった。すべての人がリュサンドロスを知っていたので、彼に近づきアゲシラオスから必要とするものを手に入れようと考えたのであった。そしてこのために膨大な数の人々が彼に従ってご機嫌を取ったので、アゲシラオスは私人のように見え、リュサンドロスは王のように見えたのである。[8]そのことに激怒したことをアゲシラオスは後に明らかにした。その他三十人（の側近たち）は妬みから黙っていることはなく、リュサンドロスは王権をも凌ぐ尊大なもので法を犯すものであるとアゲシラオスに語ったのである。」